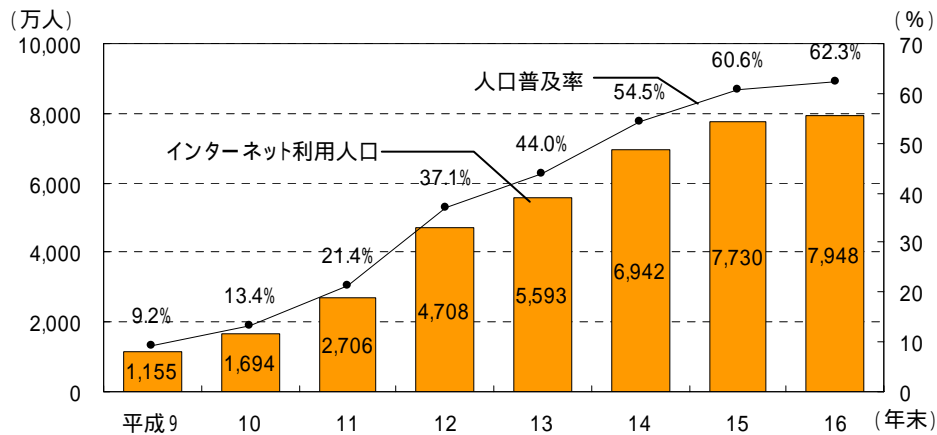


資料6 情報提供の方法

1 インターネットの利用状況

(1) インターネットの普及状況

インターネット利用者数及び人口普及率は、年々増加を続けている。



(注)

上記のインターネット利用者数は、パソコン、携帯電話・PHS・携帯情報端末、ゲーム機・TV機器等のうち、1つ以上の機器から利用している6歳以上の者が対象。

平成16年末の我が国の人口普及率(62.3%)は、本調査で推計したインターネット利用人口7,948万人を、平成16年10月の全人口推計値1億2,764万人(国立社会保障・人口問題研究所『我が国の将来人口推計(中位推計)』)で除したものと(全人口に対するインターネット利用人口の比率)。

平成9~12年末までの数値は「情報通信白書(平成12年までは通信白書)」より抜粋。平成13~16年末の数値は、通信利用動向調査の推計値

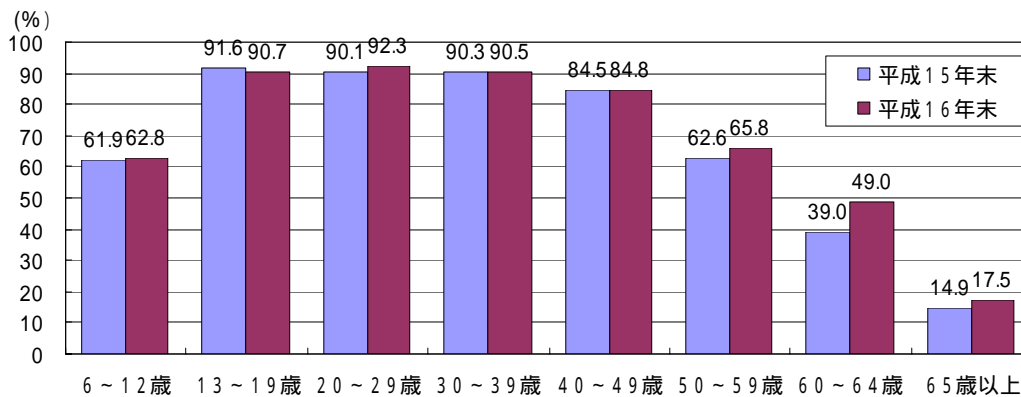
推計においては、高齢者及び小中学生の利用増を踏まえ、対象年齢を年々拡げており、平成12年末以前の推計結果については厳密に比較出来ない(平成11年末までは15~69歳、平成12年末は15~79歳、平成13年末から6歳以上)。

出典：総務省「平成16年通信利用動向調査の結果」

図1 インターネット利用者数及び人口普及率

(2) 年代別のインターネット利用率

50歳以上のインターネット利用率は、年齢とともに減少傾向にある。特に65歳以上の高齢者の利用率は、平成16年末で17.5%と低い。



出典：総務省「平成16年通信利用動向調査の結果」

図2 年代別インターネット利用率

2 高齢者・障害者の情報入手方法

障害者は障害者団体・自治体広報・新聞・知人等から、高齢者は新聞・テレビ・自治体広報から情報を入手している人が多い。

表1 高齢者、障害者の情報入手方法

		家族・親戚	友人・知人	会社・学校	医者	施設・作業所・福祉ホーム等	福祉事務所・保健所等	自治体広報・お知らせ	民生委員・相談員等	障害児者団体・親や家族の会	テレコム・CATV	ラジオ	新聞	雑誌	FAXによる新聞記事検索	電話による新聞記事情報提供	パソコン通信・インターネット	その他	どこからも得るところがない	無回答
障害者全体	1,416(人)	14	37	3	2	8	23	40	4	41	23	13	38	6	0	0	3	4	0	4
視覚障害	361(人)	17	36	5	0	5	17	62	3	33	24	41	16	6	0	1	1	3	0	3
聴覚障害	477(人)	18	43	2	1	4	25	29	2	49	17	1	50	8	2	0	4	5	0	4
音声・言語障害	55(人)	16	41	3	-	10	29	21	1	43	23	-	38	7	5	1	7	9	-	5
肢体不自由	523(人)	8	33	3	4	15	26	36	6	42	27	6	40	5	0	0	3	3	0	4
高齢者	465(人)	22	21	0	6	2	8	52	3	1	62	10	70	4	0	-	0	0	0	3

出典：「障害者・高齢者における情報通信の利用動向」（郵政研究所月報、平成11年1月）
（単位は%、小数点以下は切り捨て（1%未満は0表示）、該当なしは「-」）

3 高齢者・障害者の情報通信機器の利用状況

情報通信機器の利用状況として、障害者は固定電話、FAXを多く利用している。また、高齢者のほとんどの人が固定電話を利用している。

表2 高齢者、障害者の情報通信機器の利用状況

		固定電話	FAX	携帯電話・PHS	無線呼出し	通信用以外のワープロ	通信用ワープロ	通信用以外のパソコン	通信用パソコン	携帯情報端末	アマチュア無線	インターネットTV	緊急通報装置	どれも使用せず	無回答
障害者全体	1,416(人)	74	49	30	9	20	5	8	11	7	4	0	1	4	3
視覚障害	361(人)	90	20	39	5	12	3	15	8	2	7	0	1	1	3
聴覚障害	477(人)	50	87	20	18	24	4	4	14	9	0	0	0	2	1
音声・言語障害	55(人)	50	83	25	18	23	5	1	18	9	1	-	1	5	5
肢体不自由	523(人)	85	37	32	4	23	6	7	11	7	6	-	1	7	3
高齢者	465(人)	92	19	9	3	8	1	3	2	5	0	0	0	3	1

出典：「障害者・高齢者における情報通信の利用動向」（郵政研究所月報、平成11年1月）
（単位は%、小数点以下は切り捨て（1%未満は0表示）、該当なしは「-」）

4 障害者へ情報提供する際に必要な配慮

「情報提供する際に必要な配慮」について障害者から寄せられた意見等の内容を見ると、視覚障害者では、パソコンやインターネットを使用しているため、音声読み上げソフトでの対応を望むという人が92.2%と最も多い。また、テレビの副音声化、ホームページの画像へのテキスト併記、点字だけでなく音声での案内を望む声がそれぞれ80%以上と高い割合を示している。

東京都では、「東京都公式ホームページ・ウェブデザインの手引き」(平成16年12月改訂版)において、東京都の機関が設置・運営するホームページの制作にあたっては、音声変換ソフトを利用しているユーザーへ配慮したものとするなど、高齢者や障害者を含めた誰もが必要な情報にアクセスできるようにするための事項を定めている。

聴覚・言語障害者からは、電光掲示板やパネル等の視覚を通じた情報伝達、テレビの字幕放送や手話入り放送の充実、メールやファックスでの連絡を望む声がそれぞれ80%以上という高い割合で寄せられている。

知的障害者からは、抽象的概念ではなく、絵や図を用いた具体的な説明、わかりやすい説明文章、漢字へのルビを望む声が約半数に上っており、発達障害者は、視覚的なサポートがあると理解しやすいと65%が答えている。

表3 障害種別ごとの情報提供の際に必要な配慮(複数回答)

視覚障害者(205人)	人数	割合
1 視覚障害者もパソコンやインターネットを使っているため、音声読み上げソフトで対応できるように配慮して。	189人	92.2%
2 タッチパネル式の機械だとうまく操作できない。	185人	90.2%
3 点字ブロック上に自転車を駐輪するなど歩行を妨げることをしないで。	185人	90.2%
4 視覚障害者に話しかける時は、声だけでは相手が思い出せないこともあるので、最初に名前を伝えて。	182人	88.8%
5 場所を示すときは、右・左・前・後ろといった方向や距離、角度など具体的に説明して。	180人	87.8%
6 視覚障害者をガイドする時は、肩か肘を軽くつかませて。腕や肩を押ししたり、白杖を触ることはしないで。	179人	87.3%
7 抽象的な指示語(これ、それ、あれ等)は理解できないので、具体的に言う。	178人	86.8%
8 視覚障害者もテレビから情報を得ているため、副音声化など必要な配慮をして。	176人	85.9%
9 ホームページの画像にはテキストの説明を付けて。	176人	85.9%
10 点字だけでなく音声でも案内をして。	173人	84.4%
11 町で困っている感じの視覚障害者を見かけたら、まず「何かお手伝いしましょうか」と声を掛けて。	171人	83.4%
12 商品の取扱説明書には、スピーチオで読み取れるSPコードを付けたり、スクリーンリーダーで読めるようにして。	168人	82.0%
13 文書を読むことや字を書くことができないので、代読や代筆に協力して。	159人	77.6%
14 紙幣が判別しづらいため、支払いに時間がかかる。	134人	65.4%
15 点字ブロックの色を周辺の床色とはっきり区別できる色にしてほしい。	115人	56.1%
16 視覚障害者が利用しやすいよう、一般の公共トイレ内の設備の配置や仕様はなるべく共通にして。	105人	51.2%
17 歩行時の障害物(歩道の自転車、路上駐車車の乗用車・トラックのサイドミラー、標識、看板等)により、日常的に怪我が絶えない。	104人	50.7%
18 手に触れられるものは、触れさせながら説明して。	103人	50.2%

聴覚・言語障害（141人）	人数	割合
1 アナウンスが聞こえないので、電光掲示板やパネル等の視覚を通じた情報伝達の方法も考えて。	123人	87.2%
2 聴覚障害者はテレビからも情報を得ており、テレビの字幕放送や手話入り放送を充実して。	119人	84.4%
3 聴覚障害者と話す場合には、手話、筆談、口話等コミュニケーションの方法も人により様々なので、どのようなコミュニケーション方法が良いか、直接本人に確認して。	116人	82.3%
4 連絡方法が電話だけだと対応できないので、メールやファックスでも連絡できるようにして。	116人	82.3%
5 手話ができない聴覚障害者も少なくなく、イベントなどでは手話通訳だけでなく、要約筆記・パソコン筆記通訳も付けて。	113人	80.1%
6 手話ができなければ聴覚障害者と会話できないと決めつけず、筆談や口話（口の形の読み取り）、身振りなど色々な伝達方法を試みて。	108人	76.6%
7 難聴者は、相手の唇の動きや全体の表情等を総合的に判断して内容を理解しているため、大きな声ではなく、ゆっくり、はっきりと話をして。	100人	70.9%
8 補聴器はどんな環境でも聞こえるものではないので、静かな場所で近いところでゆっくりはっきり話をして。	87人	61.7%
9 手話通訳者が同席していても、手話通訳者ではなく本人に向けて話して。	71人	50.4%

知的障害（49人）	人数	割合
1 分かりやすい言葉で、ゆっくりと話して。	39人	79.6%
2 働いて自立していくのに足りないものを補うことにより、共に生きる隣人として受け止めて。	38人	77.6%
3 抽象的な概念ではなく、絵や図を使って具体的に分かりやすく説明して。	35人	71.4%
4 質問する場合には、ゆっくりした口調で、具体的な内容にしてほしい。	33人	67.3%
5 「知的障害」があるだけで無理だと決めつけず、理解しようとして。	31人	63.3%
6 今の時代の母親は、障害児を閉じこめておけば良いとは全く考えず、どんどん表に出て行こうと考えている。	31人	63.3%
7 知的障害者も学習意欲は高いので、学校卒業後にも学習の機会を与えて。	29人	59.2%
8 困っていそうなときは、詰問調ではなく、優しく声をかけてほしい。	29人	59.2%
9 説明文章は分かりやすくするとともに、漢字には読み仮名（ルビ）を付けて。	24人	49%

発達障害（255人）	人数	割合
1 教え方や学習の仕方をきめ細かくすることで、克服できる部分が多い。	208人	81.6%
2 視覚的なサポートがあると理解しやすい。	168人	65.9%
3 発達障害があることを周囲の人に知ってもらえるようなマークやサインがあると良い。	110人	43.1%

出典：平成17年3月11日内閣府「障害のある当事者からのメッセージ」意見募集結果より抜粋